

平成30年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要  
園芸部門

おうとうの「棚栽培」に挑戦、大規模経営を実現

○氏名又は名称 株式会社 太陽のおくりもの 斉藤果樹園（代表 斉藤 雄一郎）

○所在地 山形県東根市

○出品財 経営（おうとう、西洋なし、りんご）  
※「おうとう」は「さくらんぼ」とも呼ばれる。

○受賞理由

・地域の概要

東根市は、山形県の中央東部に位置し、農業産出額の7割以上を果樹が占める山形県を代表する果樹産地であり、おうとうの主力品種「佐藤錦」発祥の地でもある。また、平成29年4月には「東根さくらんぼ」が地理的表示として登録を受ける等、地域一丸となっておうとう生産に取り組んでいる。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

株式会社太陽のおくりもの斉藤果樹園の現会長である斉藤善雄氏は、昭和39年に就農し、りんごを主体に約3.5haを経営していたが、昭和50年代後半から、おうとう及び西洋なしの生産を増やし、昭和61年にはりんごジュースの製造販売を開始。その後、経営面積の更なる拡大と通信販売の取組をすすめ、平成19年に法人化して同社を設立。現在は、おうとうを中心に12haの大規模経営を実現している。

・受賞者の特色

（1）おうとうの管理・収穫作業の効率化と高品質果実の安定生産の実現

開花から収穫までの約2か月間に管理・収穫作業が集中するおうとうについて、作業を効率化するため、平成16年から、棚を作って樹の枝を横に張らせる「棚栽培」に挑戦。技術蓄積が少ない中で管理方法を模索し、現在は6ha中の3haで「棚栽培」を導入。高所作業の必要がなく作業の効率化が可能で、枝への日当たりも良好となり、高品質果実の安定生産を実現している。

（2）品種構成の工夫による経営規模の拡大

おうとう、西洋なし、りんごのそれぞれについて、収穫時期の異なる品種を組み合わせて管理・収穫作業の分散を図り、12ha（おうとう6ha、西洋なし3ha、りんご3ha）の品目複合大規模経営を実現している。

（3）生産者の顔の見える直接販売と通年販売による経営の安定化

「顧客を自ら確保するのが最も確実な販路」との理念の下、顧客全員に、毎月農園の様子を伝える手書きの便りと年2回商品カタログを送付して生産者の顔の見える丁寧な対応を実践。生食用果実や自社製造した加工品等の全量を通信販売により通年で消費者に直接販売することで、販売価格や経営の安定化を図っている。

・普及性と今後の発展方向

おうとうの「棚栽培」は、管理・収穫作業を効率化し、労力を軽減する先駆的な取組として注目されている。今後は、おうとうの「棚栽培」面積を更に拡大するとともに、品種数を増やして管理・収穫作業の分散や生食用果実の販売期間拡大を図り、多様化する顧客需要に対応することを目指している。